The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	不登校と優等生
Author(s)	森, 芳周
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 2, p. 26-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集：教育の臨床哲学

不登校と優等生

――学校に一生懸命通っている人たちへ――

森　芳周

昨年12月２日に、第３回臨床哲学研究会が開催された。第１回と同じ栗田、畑、寺田の３人の院生によるパネルディスカッションで、「学校の現在と不在－哲学の現場から＜不登校＞現象を考える」というタイトルで行われた。そのパネリストの３人の発表を終えて、討論の時間に、鷲田教授から次のような発言があった。

「この研究会ではずっと不登校ということがテーマになってきたんだけれど、同じぐらいの重さで優等生論をやったほうがいいと思う。・・・・（学校というものに対する）obsession（強迫観念）に対して、どうしようもなくなって、そこで出てくるのが不登校という行為ですね。

そういう形で出ている人はいいけれども、例えば、世でいう『おりこうさん』ですね。学校へ行くというのはフィクションであって、最終的な根拠はないんだ、ないけれども、こういう社会ではみんな学校へ行くことになっているんだということをちゃんとわかっている『おりこうさん』。でもそれをフィクションだと言ってしまうと、元も子もなくなるので、一応フィクションとして、みんなやってきたんだし、一緒に演じ尽くそうというふうに考えて『おりこうさん』になり続けている子もいる。その子にかかっているobsessionというのは、不登校の子にかかっているobsessionに劣らず、ものすごいものだという感じがする。・・・」

この発言は討論の流れから出てきたものというよりも、唐突な感じがするものだった。だけど、私には、その優等生とかおりこうさんというのは、自分のことを言っているのではないかというぐらいに共感できたし、みんなこんなことを感じながら学校に通っていたのではないかと思っていた。

しかし、後日行われた研究室のメンバーとの話し合いで、この＜優等生論

＞発言がそれほど積極的に受け入れられてはいないことがわかった。その話し合いで、「優等生というのは一体どういう人のことなのか。自分で、自分は優等生だという人はいないのではないか」というような疑問があった。たぶん、この疑問は正当なもので、優等生だったら誰でも自分が優等生だということを知られたくないし、自分が苦しんでいるなんて人に言うことはできない。自分さえ黙っていれば、うまく、何事もないように過ぎていくのなら、黙っていればいい。そして、自分がそんなことを考えているのをできる限り人に知られないようにして、学校に通い続けているのが優等生なのではないだろうか。もっと正確に言うと、自分が苦しんでいるのかどうかもわからずに、なぜなら、どうして苦しいのかもわからないから、別に苦しいとも思わずに、苦しんでいるのかもしれない。というのは、鷲田先生の発言を聞いてはじめて、あーやっぱり、苦しかったんだー、という感じがした、それがあのときの共感の中身だったからだ。

苦しい、苦しいと何度も書いてきたけれども、それを「解決すべき問題だ」とか思われて、カウンセリング風に分析されるのは、まったく望まないことで、例えば、「過剰適応だ」とかのレッテル貼り。そういった無神経さに耐えられないからこそ、口を閉ざしているのに。こうして個人の病理へと帰してしまうことへの批判は、不登校についてのこれまでの研究会でも大きなテーマとなっていた。しかし、不登校の場合にはある程度の市民権を得ているように感じるのだが、「優等生」というのはどうだろうか。過剰適応という「診断」は、まだ、とても魅力的な解決策のように見える。しかし、それは結局は、その当人たちをさらに傷つけることになってしまっている。臨床哲学が、苦しみの現場というプンクトゥム（punctum）から始める哲学であるならば、優等生を分析・分類し、個人の病理に帰してしまうことは、それがさらに無用の苦しみを強いるということから受け入れることはできない。

優等生とか落ちこぼれとか不登校とか、そういったものは、学校の中で作られる概念であって、そのようにして学校の中で不可避的に生み出されてくる苦痛を何とかフォローしていきたい。（例えば、教室では「暗い」とか「友達が少ない」等は徹底的にマイナスのイメージを持っている。それを先生に相談しても、先生はその子に「がんばれ」としか言いようがない。こういったどうしようも問題こそが本当にobsessionとなってくる。）もし何らかのobsessionを抱えながら、口に出すこともできなくて、それでも学校に通い続けているのなら、それはほとんど虐待を受けていると言えるかもしれない。

（もりよしちか・博士前期課程）